

言語が再び芽吹くための種

——ラリー・カウアノエ・キムラのハワイ語詩と『MELE 詩の国際便』——

阪本佳郎

Abstract

This article sheds light on art as a form of resistance, concentrating on Larry Kauanoë Kimura, an indigenous Hawaiian poet, who is famous as a core member of the Hawaiian Language Revival Movement. Hawaiian culture and language were cruelly despised and almost extinct under the U.S. colonial suppressions. When the Hawaiian Renaissance initiated its cultural struggle from the 60ies, Kimura significantly contributed to the movement; as a language educator, song-writer, and radio personality. Thanks to his dedication, Hawaiian culture, and its language came back to life. He further spread the seeds of his native language, awaiting its flourishing rebirth, through writing poems in Hawaiian from the mid-60ies. Nevertheless, due to the decision not to publish those works, Kimura is almost unknown as a poet. One of a few exceptions is a small number of his poems published in *MELE International Poetry Letter*, a private poetry magazine edited by Ștefan Baciu, a Romanian exile poet in Honolulu. Recovering Kimura's almost secret poetry in *MELE*, this article carves out the indigenous cosmology unfolding in Kimura's poems, generated from his communion with the sea (ke kai) and the land (ka aina), showing his solidarity with various "others" in the Hawaiian archipelago.

Keywords : Hawaiian Indigenous Literature, MELE International Poetry Letter,
Larry Kauanoë Kimura, Ștefan Baciu, Language Revitalization Movement

I. はじめに：ラリー・カウアノエ・キムラとハワイ語の復興

ラリー・リンゼイ・キムラ。あるいはハワイ名を用いて、ラリー・カウアノエ・キムラ。1970年には消滅の危機に瀕していたハワイ語を、革新的なプログラムによって再興させた言語教育者として著名な人物である。200年以上に及ぶ西洋植民地主義による苛烈な抑圧の歴史から、目覚ましい再生を遂げたかに思えるハワイ文化復興（通称、“Hawaiian Renaissance”「ハワイアン・ルネッサンス」）¹⁾、とりわけその根幹を担った“Hawaiian Language Revitalization Movement”「ハワイ語復興運動」において、キムラはきわめて重要な貢献を成した。

1778年、キャプテン・クックの来航時には、20万人から40万人までいたと云われるハワイ先住民は、植民者や宣教師たちにもたらされた伝染病によって夥しい数の命を失った。加えて、植民地主義的な言語政策により、ハワイ語話者は激減、その文化は著しく衰退した。クック来

航から200年後のキムラの時代には、ハワイ語を話す人間は2000人足らずであったという。それも大部分が70歳以上の高齢、20歳以下の話者は驚くべきことに30人に満たなかった（松原1994）²⁾。消滅寸前の言語を蘇らせるべく、キムラは、数々のプログラムに着手していった。1983年“A’ha Pūnana Leo”「ア・ハ・プーナナ・レオ」（ハワイ語のみで就学前の子どもたちを保育するプログラム）や“Kula Kaiapuni”「クラ・カイアプニ」（ア・ハ・プーナナ・レオ卒園生の受け皿として、全ての教科をハワイ語で教えるプログラム）を設立、ハワイの各島に言語教育プログラムを導入・普及させ、幼少期からハワイ語で教育がなされるイメージョン・プログラムを推進した。その後ハワイ大学ヒロ校におけるハワイ語での大学院教育プログラムを発足させ、初等から高等教育までハワイ語で学び通せる環境を作り出すことに尽力した。また1972年には、“Ka leo Hawai‘i”「ハワイの声」というハワイ語でなされるラジオ文化放送を開局、そこに先住民の伝統を受け継ぐ話者たちを招き、その文化知、生活知について話を訊いていった。1988年まで続いたそれは今日、失われた古きハワイの文化風俗、土地土地の歴史を語り残す証言として、貴重な文化的アーカイヴとなっている。1993年にはポリネシア言語フォーラムの書記長に選出され、消滅の危機に瀕したポリネシア諸言語の復興へ向けて主導的立場に立った。80年代よりキムラが主たるメンバーとして関わり推進した言語復興運動によって、70年代には2000人足らずにまで減ってしまっていたハワイ語話者は、大幅にその数を回復することができた。2006年には、ア・ハ・プーナナ・レオ、クラ・カイアプニの登録児童だけで2000人を超え、ハワイ語でカリキュラムを完遂したハワイ文化・言語を専門とする修士号、博士号の授与者まで輩出するに至っている。その制度・方法論、実例として成功した在り方は、言語が窮状に立たされた各地先住民運動の模範となり、多くの先住民運動の担い手たちが、今日までハワイを訪れているという。³⁾ ハワイ語は、言語復興の成功例として世界的に評価されており、今日キムラはその生涯を賭した貢献から「ハワイ語の祖父」とさえ呼ばれている。

また、“Kōmike Hua’ōlelo Hou / Hawaiian Lexicon Committee”「ハワイ語彙編纂委員会」の委員長として、新しくハワイ語へと追加される語彙を選定する責任者となっている。マウナケア山の天文台他、各国の天文学チームと共同、新たに発見された天体の命名を行っている。例えば、キムラは2017年には天文観測史上初となる太陽系の外から飛来した恒星間天体に“Oumuamua”「遠方からの使者」と名付け⁴⁾、2019年には、M87銀河にある、初めて撮影に成功した巨大ブラックホールに、創世神話 *Kumulipo* から言葉をとって“Powehi”「飾られた闇底の終わりなき創成」と名前を付けた。⁵⁾ キムラは、ハワイ語に誰よりも精通し、その言語のもつ宇宙観のエッジにまで関与する、現代ハワイ語を代表する人物である。⁶⁾

こうした言語復興、隆盛への教育者としての営みが高く評価されている一方、キムラには、ハワイ語詩人という知られざるもう一つの顔がある。70年代のハワイアン・ルネッサンスを経た80年代より言語復興運動は本格化していく。それに先立つ60年代後半から70年代初頭にかけて、ちょうど二十歳前後の青年期にあったキムラは、ネイティヴ・ハワイアンの伝統を受け継ぐ祖母の下に通い、彼女から祖先の土地の記憶や文化について学び、ハワイ語を練磨しようと手ほどきを受けていた。⁷⁾ 言語は、先住民とその土地との宇宙論的紐帯を証しする。文法や語彙が、制度やプログラムによって回復されたとしても、その言語の内実といってもよい大地や海とのつながりから生まれる世界性を取り戻されなければ、言語復興は成ったことにはなら

ない。後にみていくように、青年期のキムラは、何よりもその内実を蘇らせるために、言語を彫琢することを志していた。キムラは、先住民の一人としての自己形成期に、祖先の“Aina”「土地」への個人的な没入の経験、そしてそこから生まれる詩作を通じて、言語の内実を、まず自らのうちに甦らせようとした。後に言語復興を成功へと導いていくことになるキムラのハワイ語は、その詩語に胚胎していたと言えるかもしれない。

しかし今日を含まいずれの時代においても、その詩作は、彼の教育者としての言語復興へ向けての活動に比して、あまりに知られてこなかった。ハワイ語・ハワイ文学史上において重要な意義を持ちうるにも関わらず、キムラの詩を取り上げた文化的・学的研究は、極めて少ない。⁸⁾ そもそも、言語消滅の危機に瀕し、読者など想定すらされなかった当時、ハワイ語の詩が「公に」流通する文学雑誌や書物などの媒体で発表されることは極めて稀であった。⁹⁾ それは公刊されるよりも、授業において学生へ直接に伝えられるようなものであった。何より、上に述べたように、キムラの詩は、人によって読まれることを目的とする以上に、やがて蘇る言語のため彫琢されるべきものであったように思われる。それはルネッサンスにおける発芽を待つ、言語の種といえるものであっただろう。

本論では、キムラの一群のハワイ語詩のうち代表的なものを具体的に取り上げ、先住民の宇宙を再生しようとするその詩世界を論じることで、ハワイ先住民の文学において、それが無視せざるべき役割を担ったことを示す。それを第一の目的としたい。

加えてもう一つ、ハワイアン・ルネッサンスという画期にキムラの詩は書かれていた訳であるが、彼の詩の周囲にある、表立っては知られていないハワイ精神史の一ページを描き出したい。キムラの詩は、先住民世界にのみ限定されるべきものではなく、ハワイへと移り住んだ詩人や作家、芸術家との交わりに恩恵を受けたものでもあった。「公」の文学市場に流通することのなかったキムラの詩にアクセスすることは未だ容易ではない。しかし、それらの詩を、少なくともまとめて読むことは今日可能ではある。それは、個人の親密なつながりのうちに発行されたある文学誌に、それらの詩が掲載されていたためである。シュテファン・バチウというルーマニア出身、遍歴の後にホノルルに移り住んだ亡命詩人が、キムラがハワイ語にて詩作をしていることを知るや否や、自らの主催する詩誌 *MELE- International Poetry Letter* 『MELE 詩の国際便』に誘ったのだ。*MELE* は、1968年から1973年まで継続して、キムラのハワイ語詩を載せていた。バチウにキムラを紹介したのはジャン・シャルロだと言われている。¹⁰⁾ フランス出身、メキシコ壁画運動でディエゴ・リベラと主たる筆をとにしたこの壁画家は、第二次大戦後ハワイに移り住み、ハワイの深き文化の諸相からモチーフえ得た優れた壁画を群島に幾つも残していた。バチウは、シャルロとともに1965年に *MELE* を創刊した。二人の移民の芸術家は、キムラのハワイ語詩をとともに温かく迎え、楽しみにしていた。バチウは、定期的にキムラを訪れてはその詩作を励ましていたという。また、ジャン・シャルロの長男ジョン・シャルロは父の影響のもとポリネシアの神話・宗教学に傾倒。*MELE* に掲載されたキムラの詩を愛読し、キムラの指導のもとハワイ語を学んだ。ジョン・シャルロは、ハワイ大学マノア校の教授となり、ハワイ神話学・宗教学の第一人者として今日知られている。後に詳しくみるように、ジョンは、ハワイ・ポリネシア神話的世界へのオマージュとも言える渾心の主著 *Chanting the universe* 『宇

宙を歌う』において、キムラを「ネイティヴの感性を近代的な手法と混ぜ合わせた抒情詩人」と述べるなど、熱意に満ちた論評を展開している。¹¹⁾

キムラの詩の受容は、いずれも数少ないこのような私的なつながりにおいて為されていた。それは、移り住む外来の作家・芸術家たちと、大地や海と存在が分かち難く結びついた先住の詩人との、尊敬と寛容に満ちた交歓の原理に基づいていた。次節に述べるように、バチウの *MELE* はまさしくそのような詩的な親密圏における連帯を目指した文学誌であった。人種やエスニシティの差異が分かち境界以前に、詩が土地を歌うことによる美しさをそのままに喜び、ともにすることを、一つの連帯のあり様として肯定する媒体であった。キムラの指向する文化や言葉のあり方も、*MELE* の開かれたあり方と響きあうところがある、その文化的共振を描き出すことも、合わせて本論の目指すところである。

Ⅱ. 詩誌『*MELE* 詩の国際便』とハワイアン・ルネッサンスの時代

ラリー・カウアノエ・キムラの詩を具体的に取り上げる前に、まずそれを掲載していた詩誌 *MELE- International Poetry Letter* 『*MELE* 詩の国際便』の概要と、その創刊の地ハワイにおける(キムラも深く参与した)文化的ルネッサンスの同時代について述べ、議論の土台としたい。

シュテファン・バチウは、1946年に、共産党が台頭、スターリニズムの席卷する祖国ルーマニアを逃れ、スイス、そしてブラジルへ渡った。ラテンアメリカ諸国を歴訪し、北米シアトル、そしてハワイへと移り住んだ流亡の詩人である。亡命の旅の果てに、太平洋の群島へと漂着、ハワイ大学マノア校の教授としてラテンアメリカ文化・文学を講じた。ルーマニア語、ドイツ語、ポルトガル語、スペイン語、英語など多言語で詩や文学的エッセー、伝記、自伝、文学・政治記事を執筆、1993年にハワイにて客死するまでに、5000とも7000ともいわれる無数の新聞記事、100冊以上の書物を著した。

ホノルルに住み始めた1965年、文学誌 *MELE-International Poetry Letter* を創刊。バチウが亡くなって後の1994年まで、約30年に渡って発行し続けられた。この詩誌の特徴は、そのなりたちにある。それは、バチウが遍歴の途上において出遭い親交を結んだ世界各地の詩人や作家、芸術家から詩や挿画、写真などを募り、集められてできたものであった。届けられた作品をコピー機で印刷、手でホッチキス留めしただけの簡素なもので、一号につき200-300部と限られた部数での発行であった。書店など一般の流通に乗せられることはなく、寄稿者やバチウとつながりのあった各地の詩人・作家たちに、海を越え郵送されて人々へと渡って行く、ささやかな詩の手紙であった。しかし、その寄稿者たちの顔ぶれは錚々たるもので、メキシコの大詩人オクタビオ・パス、ブラジル近代詩の泰斗マヌエル・バンドeiraやカルロス・ドゥルモン・ジ・アンドラーヂ、ボリビアのハイメ・サエンズ、ニカラグアのエルネスト・カルデナルなどラテンアメリカ各国を代表する数多くの詩人たちが参加していた。あるいは、エミル・チオランやウジェーヌ・イヨネスコ、マルチュル・ヤンク、アンドレイ・コドレスクなどルーマニアの亡命作家たちも名を連ね、共産党政権に対する抵抗詩人たちも詩を寄せていた。サモアやベトナム、ミクロネシア、フィリピン、世界各地から多様な言語で書かれた作品がバチウのもとに集まっていた。ハワイからも、様々な背景を持つ作家や詩人、写真家が寄稿し、多様な作品を寄せていた。また、

バチウから教えを受け詩を志していた学生たちや、市井の人々も参加、「KEIKI MELE」「MELEの子供たち」というコーナーでは小・中学生までが詩を寄せていた。基準や格式、権威など斥けられた、自由で開かれた文学空間がそこにはあった。1965年から1994年までの約30年のうちに、全90号が刊行され、400人以上もの詩人や作家が参加、60以上の国から凡そ30もの言語で書かれた詩が集っていた。個人的なつながりのうちに流通するのみの小さな媒体であり、各地に散逸してしまっていて収集が困難なため、未だ研究は為されていない。しかし、文学市場の公共圏とは別種の、私的な贈与的關係に拠った「親密圏」に基づく文学運動として、MELEには比類なき価値がある。物理的な距離や、言語の差異を越えて、互いにエールを送りあう、詩の贈与交歓の世界的ネットワークがそこには広がっていた。

バチウがMELEを創刊し、ラリー・カウアノエ・キムラが詩を寄せた60年代半ばから70年代初頭にかけて、世界各地において熱き政治の季節があったことも、重要な背景として大まかにも触れておきたい。東欧では、プラハの春がソ連の戦車部隊によって蹂躪され、バチウの祖国ルーマニアではニコラエ・チャウセスクが政権を掌握し独裁体制へと進んで行く、ブラジルやニカラグアをはじめラテンアメリカ諸国での軍事政権による圧政、泥沼化するベトナム戦争、そして各地における反戦運動、対抗文化の隆盛と瓦解——。当時バチウは、主にラテンアメリカ各国のメディアにおいて民主主義政権を支持や、軍事独裁政治へのレジスタンスを援護する政治的記事を無数に寄稿し、くり返し“Poezie rezista!”「詩よ、反抗せよ」と書きつけていた。¹²⁾ MELE創刊号のまさに最初に掲げられたマニフェストも、バチウの目指した詩の連帯を次のように宣言している。

MELE: ハワイ語でいうところの「詩」であり、poetry, poesia, poesie, gedicht, shi (日本語と中国語における「詩」)。全世界の詩人や芸術家、読者を巻き込んで、国境を越えた連帯が結ばれることを希求しそれへと奉仕するもの。

MELE: これまで多くの言葉が費やされながらも、あまりにも為されたことは少ないそれへ、普遍的理解が深められてゆくための一歩。

MELE: 太平洋は蒼海の彼方に浮かぶ群島から、世界へむけて差し出された手紙——その差出人にも宛名にも、詩が自由と真実、行動、そして革命であることを信じて疑わない、すべてのものたちの名が記されてゆくであろう手紙。そして銘々の渚に立ち、我々は歌う、ロートレアモンとともにあの詩句を。

われわれの為すところは、この大地に舐われてしまった運命から生ずる義務の感情とともにある、ひとつの偉大なる献身であり達成だ。栄えあるかな！老いたる大洋よ！¹³⁾

詩誌の名である Mele とは、ハワイ語で「詩」や「歌」「祈り」を意味し、ハワイの海と島と人々のつながりを祈りとともに歌う、深みある言葉である。その「MELE」=詩の名の下に、各地の志ある者たちが、それぞれの土地の、それぞれの歴史において、真実と自由、正義をもとめる言葉を持ち寄り、境界を越えて連帯を結んで行くことを、バチウは希求していた。MELE創刊号の最初に掲載された、連帯の宣言として口火を切る詩“Vision of the great statue”「巨像の幻視」は、ニカラグアの抵抗詩人パブロ・アントニオ・クアドラによって書かれている。それは以下

のように、世界史を貫く被支配と隷従を語る年代記で始められる。

ネブカドネサルの王国の12年目に
 フエマックの支配、トゥラの年代記の3日目に
 ヨーク株式市場の1836年に、我らが世紀の47年目はスターリンの下
 1963年、ケネディとカストロの間で
 あまねく命令は、大いなる像を建てるため、70階もの高層の¹⁴⁾

「巨大な像」の象徴する大いなる歴史、それを建てるために支配され酷使されてきた遍く人間の歴史において、解放を希求する詩。マニフェストの隣に置かれたこの第一の詩からも、バチウが詩誌 *MELE* に求める姿勢が推し量られる。

ラリー・キムラのハワイ語詩も、その抑圧と反抗の時代に呼応していた。60年代半ば、ハワイ諸島も泥沼化していくベトナム戦争を背景として軍事拠点化がすすみ、軍事演習が繰り返され、苛烈さを増す植民地主義の暴力に苦しんでいた。¹⁵⁾ 更には加速する観光・消費主義に煽られ、米日の政治・産業界によって大規模な開発がすすみ、大地も海も急激に破壊されていた。ハワイアン・ルネッサンスは、こうした帝国主義に蹂躪された（ポスト）植民地支配の歴史が沸点に達したときに起きた、起死回生の鼓動であったともいえる。1964年には、ジョン・ドミニス・ホルトが、先住民文学の記念碑的著作 *On being Hawaiian* 『ハワイ人であること』¹⁶⁾ を出版、ネイティヴ・ハワイアンのアイデンティティを再び矜持あるものとして描きなおし、ルネッサンスの火付け役となった。1965年には、聖島カホオラヴェを500トン分のTNT爆薬により徹底的に破壊した模擬核実験“Operation Sailor Hat”「セーラーハット作戦」など激しい軍事演習があり、それへのプロテストから先住民運動は高まりを見せていく。1976年には、ホクレア号が製造・進水、近代航海器具・技術を用いず、失われていた伝統航海術によって操舵され、火山女神ペレの神話で語られるハワイータヒチ間の航海を辿りなおした。同船は、ハワイにおける先住民アイデンティティのシンボルとなっていく。1978年には、1896年に使用が禁じられていたハワイ語を公用語とする法案が可決、英語と並んで公用語として指定された。こうした文化復興の流れのうちにキムラの詩は生まれていた。

実際、キムラは言語という文化の根幹に誰よりも深く関わることで、そのルネッサンスの原動力となっていたのである。ルネッサンスの時代における“Kani”「音楽」の役割を振り返り総括した論考“Kani a Ke Au Maui Hawai'i Hou: The Sound of the Hawaiian Renaissance Wave”「ハワイアン・ルネッサンスの波の音」において、キムラは音楽の重要性と自らのそれへの関わりについて述べている。「ハワイアン・ルネッサンスは、“Kani”『音楽』とともに始まった・・・音楽は一つの要素でしかないが、何よりも人々の心に訴えかけ、人生のあらゆる歩みを動かす事のできる方法なのである」(Kimura, 2015)。¹⁷⁾ エディー・カマエヤ、ピーター・ムーン、ガビー・パヒヌイ、カジメロ・ブラザーズ、サンデー・マノアなどのミュージシャンが台頭、観光・消費主義的ロマンチズムに染まるアロハ・ミュージックを超える新たな音楽をつくりだそうとしていた。「ここハワイにおけるハワイアンとしてのアイデンティティが消失していくことを懸

念し、反対する夜明けとなったのは、1960年代の後半に現れた新たな気風を備えた“Kani”つまりハワイアン・ミュージックであったと言われている。・・・他のあらゆる社会運動がそうであるように、ハワイアン・ルネッサンスも1969年における黎明期に、独自の特徴的なサウンドを備え、運動を支えた音楽“Kani”をもっていた。・・・“Kani”への参加を私に駆り立てたのは、他ならぬ言語の死に対する懸念からであった。とりわけピーター・ムーン・バンドとサンデー・マノアをつくったミュージシャンたちとの協働が発端となった」(Kimura, 2015)¹⁸⁾。それは、ハワイの伝統音楽はもとより、ジャズやボサノヴァなどの幅広い音楽からインスピレーションを得、あるいはビートニクなどの対抗文学の影響を外から取り入れた、ハイブリッドな試みでもあった。キムラは、ピーター・ムーンやエディ・カマエに誘われ彼らの「ハワイ語のグル」¹⁹⁾として、ハワイ語の歌詞を提供していたのだった。中でも、ルネッサンスの大立役者であるエディ・カマエに詩を提供してできた歌曲“E ku‘u morning dew”「恋しき、朝露よ」は、古典的地位を獲得した名曲である。

E ku‘u morning dew	恋しき、朝露よ
Alia mai, alia mai	待っていてくれ、そのままに
Maliu mai ‘oe	私の呼ぶ声に
i ka‘u e hea nei	耳をすまして
E kali mai ‘oe	どうか待っていてくれ
ia‘u nei, ia‘u nei	私のため、私のために
‘O wau iho nō	あなたのものであり続けるから
me ke aloha	愛を込めて
Wehe mai ke alaula	明けもどろ
‘Ōliliko nei lihau	濡れた朝露が輝く
E ho‘ohehelo ana	紅く染まった
i nēia pāpālina	頬に滲む
I uka o Mānā	マナとともに
i ka ‘iu uhiwai	高原を包む霧帷子のなか
Ma laila nō kāua	そこで、私とあなた
e pili mau ai	ともに、永遠に ²⁰⁾

清冽な朝、曙光を紅く滲ませ草葉に滴る morning dew「朝露」が、世界を映し宿し、凜然と輝いている。日が高くなるにつれ遂にはかき消えてしまう運命にあっても、その小さな玉鏡は、美しさを湛えてやまない。それに寄せられた想いは、時とともに消えゆくものではない。その朝露を「あなた」に喩え、時の儂さを知りながらそれでも、永遠の愛を信じ願う。現代ハワイ音楽の古典とも言えるこの「恋しき、朝露よ」は、抒情的な恋愛歌の名曲として今日もよく知られている。しかし、成立の時代背景と、^{mele}詩の出自を鑑みれば、その歌からは、ハワイの経験した植民地主義の暴力に満ちた近代史が思われる。そしてそれを書いたキムラの、文化の再生

へ込められた祈りが希求の想いとともには伝わってくるだろう。文学史家ステファン・スミダは、キャプテン・クック来航以後のハワイ文学史を、植民者、移民、先住民などの多様な文化的視点から描き出した浩瀚な書物 *and the view from the shore, Literary Traditions of Hawai'i* 『そして、海岸からの眺め——ハワイの文学的伝統』において、キムラの詩を取り上げ、とりわけ「朝露」の詩のもつ象徴性について論じている。ハワイ本島の主峰、聖火山マウナ・ロアの裾野にあるワイメアの牧場に育ったキムラは、その歌詞が、自らの幼少年時代の記憶から生み出されたものであると振り返る。楽園ハワイを消費する観光主義的ロマンチズムのクリシェであった太平洋の海に沈む「夕陽」のイメージに対して、壮麗かつ峻厳な山の大地を照らす「朝日」は、先住民の尊厳そのものを象徴する光であった。キムラは、高原の馬たちが食む牧草に降りた朝露に、曙光が宿り世界が映しだすのを見て、失われた祖先たちの大地への眼差しを感じ取りそれを歌にした。スミダによれば、キムラの詩は、ハワイの伝統的な歌 *MELE* の響きを保持していることから、よもやそれが現代の書き手によるものとは考えられず、時に「詠み人知らず」のものと思われていたという。²¹⁾ 古きハワイの祖先たちの宇宙を、近代詩や歌謡などの新たな容れ物において生かし、蘇らせる希望の念がキムラの言葉には溢れていた。

ラリー・キムラが研鑽に励み、継続して *MELE* に寄稿していた詩も、まさに上で示したようなルネッサンスの高まる気運から波を受けとっていた。消滅に瀕した言語を甦らせるべく詩を書き、それらを、まさにハワイ語で「詩」を意味する *MELE* という詩誌に寄せていた。バチウの *MELE* の創刊と進展自体、ルネッサンスというハワイ同時代史の躍動と機をともしながら、国家やイデオロギーの誇示する大きな歴史に抗する精神を、国境を越えて結び、小さな個人や被抑圧者たちのもつささやかな物語、つまり「詩」を守り、発することを目指していた。*MELE* というプラットフォームは、その言語が再び甦り花咲く種の培養地を、このハワイ語詩人に用意したともいえる。

以下、具体的に、*MELE* に掲載された詩を取り上げながら、キムラの詩世界について論じていきたい。

Ⅲ. 『MELE 詩の国際便』におけるラリー・カウアノエ・キムラの詩

MELE におけるラリー・カウアノエ・キムラの作品を、時系列順に列挙すると次のようになる。まず1966年に刊行された第6号に“Manu Kolea”「ムナグロ」、1967年第7号には“He Manawa wale no”「ことあれかし」、1968年第9号には、“Kapalaoa”「カパラオア」、1970年第14号には“Me ka nani 'o waimea”「ワイメアの美しさ」、1971年第20号にはトーマス・マーティンの詩“The Flight into Egypt”「エジプトへの空路」のハワイ語訳“Ka pūhalahio i 'Aikupika”を、1973年25号には“Luahinewai”「ルアヒネワイ」が掲載されている。

後に詳述する、キムラの詩に開示されるネイティヴ・ハワイアンの宇宙観（コスモロジー）における“Aina”「土地」の重要性から、本稿では、土地の名を冠した詩2編“Kapalaoa”「カパラオア」と“Luahinewai”「ルアヒネワイ」を取り上げたい。そして次の第IV章において、キムラの詩の、現代に至るハワイ先住民文学との連続性と、それにもつ意義について考察する。

1. カバラオア

MELE に寄稿されたラリー・キムラの詩において、もっとも深く、先住民の集合的な記憶に触れているのは、火山の女神ペレに捧げられた“Kapalaoa”「カバラオア」である。この詩は、ハワイの若手詩人特集号として編まれた1968年発刊の*MELE* 第9号に掲載されている。

The legend of KAPALAOA

The old woman leaning on her cane asked,
“I wahi i'a, a i wahi pa'akai?” (Some fish, a little salt perhaps?)
The reply was, “'A'ohe i'a . 'O ka piapia o kou mau maka 'o kōu pa'akai nō ia.”
(There is no fish. The encrusted white matter in your eyes is your salt.)
“A pehea kahi 'ōpū?” (How about some stomachs?)
“Na ke Ali'i nō!” (It is for the king!)
“A pehea kahi pihapiha?” (How about gills?)
“Na ke Ali'i nō!” (It is for the king!)
“A pehea kahi unahi?” (And what about the scales?)
“Na ke Ali'i nō nā mea a pau!” (Everything is for the king!)

The old woman left the people who refused her and disappeared onto the slopes of Maunaloa. Not long after that she returned in the form of lava, destroying the royal family and the people who denied her. The old woman was Pele.

カバラオアの伝説

老婆が杖に寄りかかりながら尋ねたことには、
「少しの魚を、ほんのちょっとの塩だけでいいんです」
「魚などもうない。塩なら、お前の目尻に溜まったその白いものを舐めるがいい」
「そこにある腑はどうされるのです？」
「これは王へのものだ」
「この残された鰓は？」
「王のものだ」
「では、この鱗だけでも」
「すべて王のものだ」

老婆は、自らを拒否した者らをおいてマウナ・ロアの坂道へ消えていった
彼女は溶岩へと姿を戻し、程なくしてあの王たち一族を呑み込み焼きつくしていった
まさしく、この老婆こそペレであった²²⁾

この詩は、ハワイ大学人類学部における民族誌的調査のため、1967年にキムラがカパラオアに滞在した経験から生まれたものである。カパラオアは、ビッグ・アイランド、コナの北西部に位置する荒涼とした海岸地帯で、1896年、政府あるいはハワイ王家が所有していた土地をリースすることを可能した土地法 Homestead Law の対象となった地域であった。キムラは、その頃にはほとんど誰も住まなくなった、一見不毛の溶岩台地であるカパラオアの、生活や風習、歴史・神話などをフィールド・ワークにて採集、*Kapalaoa Homestead Life* 『カパラオア・ホームステッドライフ』と題する論文にまとめ大学へ提出した。その土地に詳しいキムラ自身の祖母ライカをインフォーマントとして、神話や言い伝えの聞き書きに始まり、建物の工法、食事、子育て、集落間の関係、宗教など、項目別に整理された簡潔な記述がなされている。さらにカパラオアの現在の状況から導かれる未来への展望まで含めた結論を含めて閉じられる、充実した民族誌となっている。ただ、何よりもこの論文を特別なものとしているのは、キムラによる詩 =Mele が掲げられていることである。詩は、祖母ライカが彼に語ったカパラオアの言い伝えの聞き書き(上にあげた詩「カパラオアの伝説」)を受けて、今度は詩人自身の詩として、伝承のさらに詳しい神話・歴史的背景を踏まえた上で、その宇宙を描き直してみせる。²³⁾ それは、*MELE* 第9号において再録され、「カパラオアの伝説」と並べて掲載されている。

KAPALAOA

'O ka lilelile o ka 'ili kai
 Ke kai malino o Kona
 Ke hūlali mai nei ka hali'a
 'O ka li'a o ia kaha 'o Kapalaoa
 Ka pana nō ka la'a 'o Pele
 'O Pele ke kino lau, ke kino kaukahi
 Lako 'ole e ke noi
 Ka noi ha'a ke noi nui
 Ke nonoi a ka wāwae 'ekolu
 Hō'ike wale nalowale
 Kapa ahi kihi 'ole
 Lauahi pakele 'ole
 Ikiiki ka 'ili i ka māhu
 Pulu 'ia e ke kai wewela
 Mānoanoa i ka lua'i pele
 Luku, luku pau e ka 'enuhe
 I ka lau o ke koali
 Luku e ka loli
 I ke kāheka kai
 Luku e ka i'a wāwae, ka i'u hi'u

'Ōneanea 'o ia kaha ē
'Auhea wale e ke Ali'i ē
'O Kūāiwa nona ka lei
Ka lei 'o ka niho palaoa
'O Pōhaku'loa nāna Kūāiwa
'O Halemāhia nona ke kaulana wa'a
'O Kapuaokalaulani nāna ka ipukai
'O Meko nona ke ana ulana
'Auhea wale 'oukou
I ka 'ehu kai, i ka pāku'i kai
Ke kai 'ōlino i ka lā
Kai hūlali i ka pā kōnane
Ho'olono i ka nehe kai
Hua'i ka hali'a
Kau aku iā Kapalaoa
I ka mālie, i ka la'i
I ka malu o nā kuahiwi 'ekolu
Ke aloha nui ē

カパラオア

水面きらめく
穏やかに風いだコナの海
輝かんばかりの力こそ、その土地の豊かな記憶
カパラオアの記憶
その鼓動はペレにむけて脈うたれる聖なるもの
変幻自在のペレが、そこにひとり立っている

願いは満たされなかった
控えめだが、とても大切な願い
三本足の願い
彼女はふらりと現れて、ふらりと消え失せる
果てなき火焰の絨毯をひろげ
触るものすべてを根絶やしにするペレの流れ
その皮膚は蒸気にむれて粘っこく
沸騰した海に吞まれていく
赤い溶岩に被せられ

海鼠どもは滅ぼされ
朝顔の葉のういで
海牛たちは虐殺されてゆく
潮溜まりに棲む
足の生えた魚も、ヒレの生えた魚も、皆滅ぼされ
その場所は不毛の地と化してしまう

かの君臨者たちはどこへ行った？
クァイワよ、レイを与えられし者
クジラの牙でできたレイよ
ポハクロア、クァイワを娶ったものよ
ハレマーヒア、カヌーが休む岬
カプアオカラウラニ、馳走の盛られた皿を運ぶものよ
メコ、織物の洞穴よ

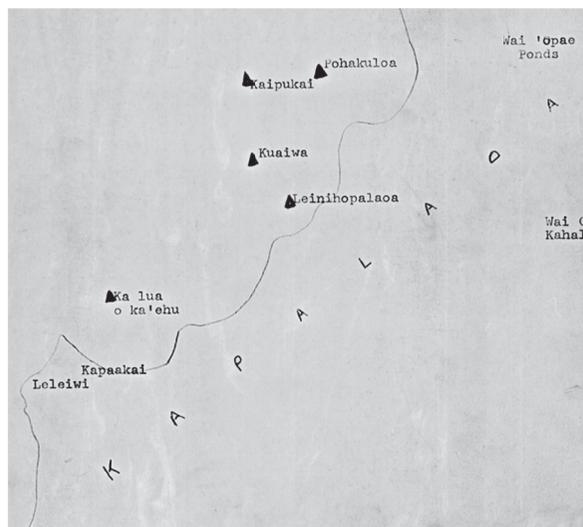
おまえたちはどうなったというのだ
飛沫をあげる海の、波打つ海のなかで
陽光に輝く海
月明かりに照らされた海
記憶はいま紐解かれる
ここ、カパラオアで
穏やかに凪いだ、静寂のなか
溢れんばかりのアロハとともに²⁴⁾

キムラは、海と溶岩大地のランドスケープから立ち上がる、祖先の記憶と密接に結びついた神話的宇宙を描き出す。カパラオアのチーフ、ポハクロアの、その最も高位にあった妻クァイワは、物乞いをするひとりの老婆の願いを無下にも斥けた。しかし、その老婆こそ火山の神ペレであり、ペレは怒りとともに、一族をその溶岩の腕で呑み込んでしまう。一族の面々は、そのまま沖で岩となり、海と大地の一部となった。Aina「土地」と一体となったのである。Kapalaao *Homestead Life* 『カパラオア・ホームステッドライフ』において、キムラは、次のように解説も加えている。

ペレの願いを拒否した首長とその妻は、溶岩の指先からどこへも逃れることができず、海に落ちるしかなかった。ペレはすぐさま飛びかかり、かれらの上に覆いかぶさっていった。今日でも海から突き出している巨大な岩は、ポハクロアとクァイワの墓石である。カプアオカラウラニは、食べ物を盛った大皿、イプカイを運ぶ従者だ。ハレマーヒア、メコも同様である。クァイワは、彼女の“leinihopalooa”「レイニホパロア」（人間の髪の毛の束で結わえられたマッコウクジラの牙でできたレイ（ネックレス））をどこかへ落としたが、ペレは

それをもすぐさまに呑み込んでしまった。この土地の名, “Kapalaoa” 「カバラオア」は, 「クジラの白牙のペンダント」を意味し, この伝説に由来している。今日では, 半月形のかたちをした岩が, そのペンダントにあたとされ, 海岸から 50 フィートのところにあり, 引き潮の時分にはそれが目に見えるという。大きな岩は, クァイワであり, そのペンダントの岩から 100 フィートほどのところに位置している。

カプアオカラウラニは, 浅瀬にある大きな穴で, イブカイ, つまり, ご馳走の盛られた皿のかたちをしている。彼女はそこで命を落としたのだ。・・・メコは, カバラオアから 1/4 マイルのところにある岩で, カ・アウ・アウとレイウィとの間に位置する。水面のすぐ下にあり, 見えるか見えないかというところだ。私には信じられないが昔ハワイアン女性は, このメコの底にある洞穴のなかで敷物を織っていたのだという。なぜそんなことが? と問うと, 「それはそう。そのように語り継がれてきたのだから」という答えがかえってきた。²⁵⁾



上写真は、キムラ自身によって撮影されたものである。中央にドットで囲まれて示された部分が、レイニホパロアとされる場所、上部中央に示されるのがクァイワであり、右にあるのがカイプカイ（カブアオカラウラニ）。メコは左のさらに遠く、*印が付いているところに位置している。²⁶⁾

火山女神ベレによって滅ぼされ、岩や洞穴へと姿を変えた祖先たち、その高貴さを示すマッコウクジラのレイ（クジラの牙と人間の髪の毛でできたレイニホパロアはもっとも靈威を備えた装飾品であった）——。キムラは、伝承の過去とつよく結びついた先住民の Aina「土地」に刻まれた世界認識を、新たな詩によって歌い直している。ハワイアンたちの神話的な集合記憶に基づく口承の物語は、世代を越えて祖母ライカにまで口伝されてきた。しかし近代を経たキムラの言語は、口承ではなく、近代詩の書字形式を選んだ。絶たれてしまいつつある祖先たちの世界との結びつきを、あえて近代詩の技巧でもって、キムラは今に蘇らせようとする。「古きハワイの伝統を、新たに導入された技術でもって」（Sumida, 1991）²⁷⁾ 歌うキムラの言葉が、喪失を経験した言語の新たなはじめりを期して、言語復興運動の原動力となっていく。

2. ルアヒネワイ

Luahinewai

Pae akula i ke one lā 'o Luahinewai
 Wai hu'ihu'i i ka mana'o lā
 Ha'oha'o lā i ka 'ihī'ihī o ia wai lā
 Wai kia'i kapu i ka mea o loko
 'O loko hana nui iā Kīholo lā
 Ke one hānau o ke kupuna lā
 He puna wale nō ke koena hale o Kaua'i
 E kilo'oe e Kaua'i iā Kalaemanō
 I ka 'opihī makaiauli kau ma ka pali
 I ke kai ki'i lā e ki'i ana lā
 Pahupahu lā'au ku'u hemo lā.

ルアヒネワイ

ルアヒネワイの浜辺に上がり
 頭のなかは水で凍てつく
 この大なる泉の聖水が神秘を生む
 水よ、深奥にあるものをまもる、禁忌の守護者よ
 キーホロを焦がれる温かく豊かな内面

祖先たちの産土よ
剥き出しの珊瑚よ、カウア・イの住んだ家の残骸
みよ、カウア・イよ、カラエマノーだ
暗碧色をしたオービヒが岩壁にへばりついている
それらを浚っていくほどに迫り上がる大海の中で
つよく、つよく、打ちつけ、引き剥がそうとする²⁸⁾

ハワイ・ポリネシア神話・宗教学者のジョン・シャルロは、その著書 *Chanting the universe* 『宇宙を歌う』（1983）で、詩「ルアヒネワイ」のハワイ語としての美しさ、詩人と伝承的過去との交感が開示する宇宙について、熱を入れて論じている。その批評の内容を、以下に要約したい。

ルアヒネワイとは、ハワイ語で、「水に棲む老婆の姿をした精霊」のことを指し、またある池の名前ともなっている。この詩は、ルアヒネワイという place 「場所」におけるキムラの個人的な経験を歌ったものである。キムラはあるとき、友人たちとコナの海岸に沿ってボートを出し、釣りを楽しんでいた。ふと気づけば、ルアヒネワイの池がある海岸の沖にまできていた。その辺りはキーホロという、キムラの一族がもともと住んでいた地区の近くであった。その聖なる池については、一族のうちに伝承された物語があった。ある一人の老婆の姿をしたモオ（精霊、妖怪）が水中に住んでおり、そこには古代の首長たちの遺骨が隠された洞窟があるのだという。キムラは、その近くに生まれ育ち、病にかかり亡くなったとされるカウア・イというある知恵ある kupuna 「祖先」のことも耳にしていた。多くの島人がカウア・イに相談事を持っていったのだという。また、この地域の島人たちの風習もキムラは熟知していた。“Kalaemanō” 「カラエマノー」つまりシャーク・ポイント、サメたちの集まる場所まで行き、その岩肌にごびりつくように群生している “ōpihi” 「オービヒ」（フジツボ）を棒で剥がして持ち帰るのである。キムラは、先住民の古き記憶を湛えた水域に至り、思わずボートから海へ飛び込んで、ルアヒネワイをめがけて泳いでいったのだった。この海域との交感から生まれたのがこの詩「ルアヒネワイ」であるという。²⁹⁾

シャルロは、詩のハワイ語としての美しさも強調する。ハワイ語に精通した読者ならば誰もが、即座にキムラの使う類音の連なりという技法に気づき、舌を巻く。ある行の最後の母音がつづく行頭の音と類似しており、詩の全体をしっかりと一つのものとする。そして、波のように連続する思考を前へと押し広げ運んでゆく。キムラはそれを為すのに、古く宗教的な言語を用い、見た世界を切り取る。詩人はまず、ルアヒネワイへとたどり着く。第一行の “pae” 「上陸する」という言葉は、何かが岸へと漂着するときにも使われうる。彼が新たにそこへ運ばれて来た異人であることを示す。浜辺の砂は、未だ彼の産土ではない。しかし、すぐに池が彼に働きかける。思考を麻痺させ、凍えさせるのだ。その水は、詩人の頭、つまり “mana’o” 「理性」を “ha’oha’o” 「神秘」へと変える。彼は “ihi’ihi” 「水の聖性」によって神秘化されるのだ。そして深みへと進んでいく。聖なる水は、その水中洞窟にある “loko” 「内なるもの」を守護する。そして次の行もその言葉 “loko” を引き継ぐが、今度は、その指示対象は詩人自身の内面へと向けられたものである。その水中で、もっとも深く、もっとも統合的といえる交感がおこる。そこは、わたつみに育まれた祖先の記憶を宿す “Na’au” 「腸（はらわた）」である。この二重化された “loko” の使用は、

ルアヒネワイの海が、詩人自身の内奥世界と結びつけられていることを示している。精神・身体の内奥、つまり“hana nui”「大いなる入江」は、祖先の産土の地たる“Kīhōlo”「キーホロ」を迎え入れ、詩人は、祖先であり預言者とされるカウア・イと向きあう。それは、kupuna「祖先」とpuna「珊瑚」の音のつながりにおいても提示され、自らの祖先が、珊瑚と一体になっていることを想像させる。カウア・イの生きていた物質的な痕跡は、時とともに全て消え去ってしまった。キムラは、その珊瑚の台に降り立って、カウア・イに聖なる力において“kilo”「見護って」もらえるようお願いをする。海へと突き出した岩場の突端、小さな「オーピヒ（フジツボ）」の一個体が、それを剥がし落とそうとしつこく波打つ海潮にも関わらず、岩肌へへばりついて離れようとはしない。そのオーピヒは詩人に他ならない。キムラはようやく始祖の土地へと戻ったのだ。存在が、引き裂かれようとも、どこにしようとも、投げ出されても、これからは心の一部をこの土地が占める、そこへ居続けることができるのだ。“Makaiaūli”というオーピヒの暗碧色を表すためにだけ使われるその言葉の選択から、この土地への愛着の深さが表れている。オーピヒの暗碧色は、ルアヒネワイの海の色にひとしい。この最後の一行こそまさしく、水の内面と詩人の内面が同一のものであることを示している。

以上のような詩の分析、批評を行ったジョン・シャルロは、近代的生によって引き裂かれた現代ハワイ先住民の土地との紐帯が、このような「場所」をめぐる詩の創作によって再生成され、生の強度が取り戻されていくことに、ただただ感嘆しきっていた。³⁰⁾

ジョン・シャルロは、父親ジャン・シャルロよりキムラの詩のもつ美学を伝え聞くとともに、すでに *MELE* に掲載されていたこれらの詩を愛読していた。ジョンは、サモアでの研究滞在からハワイ大学へと帰還するや、キムラを探すために大学中を駆け回ったという。ある会合で立ち話していたキムラを捕まえるや、自らがその詩を愛読していることを率直に熱意をもって伝えた。その後、ジョンは、キムラと親交を結び、彼のハワイ語の授業に出席するようになった。授業では、*MELE* に掲載された詩について議論が度々為されていた。そこでの対話から、「ルアヒネワイ」に対する上のような批評が生まれたという。一方、「ルアヒネワイ」が掲載された *MELE* 25号の同じページには、ジョンの父親で壁画家のジャン・シャルロが、このネイティヴ・ハワイアンの水の聖性を称えた美しい詩に、アヴァ（コショウ科の同名の植物から作られた宗教的儀礼にも用いられる神酒）の杯を捧げる僧侶の挿絵を添えていた。キムラの詩は、*MELE* における限られた流通ながら、シャルロ親子ら移民たちを含むハワイの芸術家たちに認められ、その感性を彼らと共振させていた。³¹⁾ そのような多様な交感の関係性のなかで、シャルロ親子はハワイ語でも詩を書き、それらを *MELE* に掲載していた。パチウの主催する *MELE* は、ハワイ語をめぐる親密圏のプラットフォームとなり、その精神の交歓を目撃していたのである。キムラ自身、自らの詩の他にも、トマス・マートンなど他の詩人の詩をハワイ語訳することも手がけていた。それ自体、複数性の場であった *MELE* の「詩の国際便」は、その詩語を外へと開き、鍛え、試す場をこのハワイ語詩人に与えていた。



© The Jean Charlot Estate LLC. With permission.
ジャン・シャルロによる「アヴァを捧げる僧侶」の挿絵³²⁾

Ⅳ. ラリー・キムラの詩とハワイ先住民のコスモポリティクス

植民地主義に抗するハワイ先住民運動の文化政治において、おそらく同時代の多くの先住民運動がそうであるように、その核心におかれるのは、「場所」を主体的なものとし、それとの独自の存在論・認識論的つながりを回復することである。そこでは、大地や海、火山、川、植物や動物など、先住民の宇宙そのものを息づかせる諸存在が、「対象」ではなく、主体的なアクターとして、その政治に参加している。西洋近代の所有観念をもとにした土地のあり方とは異なった、具体的な「場」との先住民独自の宇宙論的紐帯を蘇らせること。それが、上の「カパラオア」や「ルアヒネワイ」といったキムラの詩でも目指されていた。

こうした「コスモポリティクス」³³⁾は、現代においてより闘争の焦点となっている。例えば、ハワイ先住民運動の指導的立場にいる二人の知識人ジョナサン・ケイ・カマカウイウオ・オレ・オソリオとクレイグ・ハウスによって編まれた論集 *The Value of Hawai'i* 『ハワイの価値』（2010）³⁴⁾ が、そのことをよく物語っている。法律や教育制度、福祉、エネルギー問題、生態系保全、歴史遺産保全、政府・統治など、あらゆる社会的テーマにおいて、植民地主義的暴力に対するハワイ独自のオルタナティブかつ「本来の」あり方を果敢に提示している。Price「価格」ではなく Value「価値」を。つまりプランテーションや観光・開発といった植民地主義的経営の経済学（Price）ではなく、定量的な物差しでは測れない独自の価値（Value）を示すこと。各論の基調にある姿勢は、先住民独自の社会的、精神的なあり方、その世界性や宇宙観を尊重し、護り、それに即した社会のあり様を模索していることである。例えば、「法律」の項目では、ネイティヴ・ハワイアンの先住民運動と土地開発公社との間で争われた法廷闘争における文書が引用され、“Aina”「土地」が、所有や開発の対象ではなく、まさに政治的主体として参加していることを力説している。

Aina「土地」は、ネイティヴ・ハワイアン宇宙観の中でも、もっとも生命に溢れた部分だ。そして、それは替えの効かないものである。大地、空気、水、そして海、自然界のエレメントは、相互接続、相互依存する有機体である。ネイティヴ・ハワイアンにとって、大地は商品ではない。それは、ハワイ人としての文化的、霊的とさえいえるアイデンティティの土台である。Ainaは、Ohana「家」の一部であり、家族に対してそうするように、彼らはその面倒を大切にみるのだ。Ainaつまり土地・自然環境は、彼らにとって生きている。尊厳を守られ、愛され、讃えられ、そして崇拜される。35)

こうした土地との関わり方は、公社のもつ西洋近代的な土地所有の観念とは異なるあり方を打ち出している。政治係争の制度的場に、先住民の大地との、精神的、身体的、そして霊的な紐帯をもとにした存在論を敢えて持ち出し、それをコスモポリティカルな闘争として展開する。こうした先住民の宇宙を提示する最上のものは、文学である。歌や祈り、詩、つまり“mele”であり、そこで詠まれた宇宙を為す一つ一つの要素との交わりを通じて、先住民の世界は証しされると考えられていた。『ハワイの価値』が、書物の締めくくりとなる最終章に、カルロス・アンドラーデによる詩、“Aloha hā'ena”「愛しきハー・エナ」を配置したのは、その象徴であると言えるだろう。カウアイ島最北部の山海に挟まれたアフプアア（古代ハワイ人の用いた伝統的な土地区分）である「ハー・エナ」の、その美しき山なみ、波濤、岩たち、それらに宿る祖先の記憶へと捧げられた詩が、Aina「土地」の印象的な写真とともに掲げられている。アンドラーデは、次のように述べている。36)

Mo'ōlelo「(複数形の)歴史」、Ka'ao「物語」、そしてMele「詩、歌」は、「場所」について、そして人々と「場所」との関係性についての情報を、世代を越えて運んで行く。私たちのKūpuna「祖先」は、Āina「土地」(私たちの心、霊性、身体を育むその宇宙のすべての存在)を維持し、私たちの生きるこの時代について歌うMeleをつくることを励まし続けてくれている。これはそんなMeleのひとつ。37)

ここでアンドラーデは、āina「土地(複数形)」を先住民の宇宙を形成する諸存在のすべて“all in the universe”として定義する。祖先の記憶を介した交歓を通じて、Aina「土地」へ再び結びつけるものとして“mele”「詩」を打ち出している。それはまさにキムラが、60年代の半ばより始めていたことだった。「近代の生によって土地とのつながりを失いつつも、古代性と特別な関係性を結び、それを再生成し、回帰していく」38)ように、近代の詩形式と古代の感性の双方の技術を合わせ用いてそれを為す試みの、キムラは先駆けであった。

60、70年代、ルネッサンスの時期に出された書物の多くにも、こうした先住民のコスモロジーを復権させていこうとする試みはあった。ハワイ民俗世界の叡智について浩瀚な業績を残した大学者メアリー・カウエナ・プクイは、キムラの師でもあり、1966年に*Place names of Hawaii*『ハワイの土地の名前』39)を刊行。ハワイ群島の夥しい土地の名を、時にポリネシアの他島の名前とも比較しながら分析、先住民のAina「土地」とのつながりを取り戻す大きな土台を提供した。同年には、1905年にナサニエル・ブライト・エマーソンによって編纂、翻訳、出版されたフラ

の歌詞集 *Unwritten literature of Hawai'i* 『ハワイの文字化されていない文学』が再刊されていた。「ハワイ人たちの伝承的過去へと生き生きと触れる共同の想像を保ち続ける」⁴⁰⁾ フラにおける祈りの詩行を取っていた。ルネッサンスの60年代から70年代には、ネイティヴ・ハワイアン土地と伝承的過去との紐帯を証しするこうした著作が、立て続けに出版されており、それらは今日まで幾度となく再刊され、影響力を持っている。キムラの詩作は、こうしたハワイアン・ルネッサンスにおける出版の流れにも同調、伝統的な Oli 「チャント」や Hula 「フラ」の精神から、祖先の記憶との交わりが織る宇宙を、近代的な言葉の形式において再創造していた。そのあり方を、後続するハワイ語話者のために開いていたのである。

そして近年においてとりわけ、植民地主義の歴史において破壊されてきた先住民の世界、その自然の諸要素との関わりを、近代からの認識論的・存在論的な転回を目指すことで蘇らせようとする文学的試みが、注目を集めている。例えば、Ke kai 「海」と Ka aina 「土地」それぞれに捧げられた二冊、カレン・アミモト・インゲルソルの *Waves of Knowing—A Seascape Epistemology* 『知ることの波——海景の認識論』（2016）やク・ウアロハ・ホ・オマナワヌイの *Voices of fire — reweaving the literary lei of Pele and Hi'iaka* 『火の声——ペレとヒイアカ、文学のレイを編みなおすこと』（2014）はその代表的なものである。前者『知ることの波』は、大洋の無数の海を破壊してきた観光植民地的サーフィン産業を批判、サーフ文化をその現代性を維持しながら、先住民の文化的位相へ取り戻そうとする試みである。Oceanic literacy 「海のリテラシー」や Seascape ontology 「海景の存在論」という概念を持ち出し、海や、海に生きる諸存在との身体的な交感から蘇る祖先の記憶とつながり、その宇宙を、再び生き直そうとする。ここでも、mo'olelo 「物語、歴史」や mele 「詩、歌」によって伝えられる、具体的な「場所」に宿るコスモロジーを分析することが、大きな方法論となっている。⁴¹⁾ 後者オマナワヌイの『火の声』は、『ペレとヒイアカ』というハワイアンたちにとり最も権威がありかつ親しまれてきた神話をとりあげ、この古典的叙事詩の経てきた植民地主義の下での受容史を批判的に辿りつつ、物語に現れるランドスケープと祖先の記憶と深く関わる土地の名前から開示される宇宙を描き出す。Kanaka 'Ōiwi 「ハワイ先住民」としてその土地を「眼差す」こと、その土地に「ある」ことを取り戻そうとする。⁴²⁾ このような先住民のコスモロジーを蘇らせる試みにおいて、Aina 「土地」とのつながりを、祖先の記憶を抱く神話伝承を介して自らのハワイ語に求めようとするキムラの詩は、一つの重要な参照点である。オマナワヌイは『火の声』の随所にキムラの言葉を引いている。「元来ハワイ人にとって、場所の名前というのは、“kupa” 「natives 土地のもの」そのものと考えられていた。それは、人々を“Ohana” 「家」へと、個人的な過去の記憶へと、そして歴史へと繋げる祖人のようなものだ。もっと言えば、人の名前というのも同様に、そうしたつながりを証する。それらは祖先の場所の名前を組み込み、家族の歴史への言及を含み込むものだったのだから」（Kimura 1985）⁴³⁾。オマナワヌイは、このキムラの言葉を受けて「“Inoa Aina” 『土地の名前』は、“meiwi” つまり、歴史と物語を包有する詩のデヴァイス」（Ho'omananui 2014）⁴⁴⁾ である、とつけ加えていた。Aina 「土地」は、ネイティヴ・ハワイアンの記憶の母胎である。「土地」を言祝ぐ詩や歌、祈りの文学は、「名前」でもって先住民の宇宙との存在論的な紐帯を確認し、そこに蓄積された文化的な記憶を蘇らせる。60、70年代のハワイアン・ルネッサンスにおける新たな言語の黎明において、キムラの詩はその初発の力をすでに打ち出していたのである。

V. さいごに

2019年、前年のシュテファン・バチウ生誕100周年を記念して、*MELE-International Poetry Letter*へのオマージュとなる詩誌 *MELE-Archipelago: Homage to Ștefan Baciú, For the Poet's Centennial Anniversary*⁴⁵⁾ が刊行された。*MELE-International Poetry Letter* に寄稿していたバチウの存命の朋友たちや、*MELE* の精神に共鳴する新たな詩人や作家、芸術家たちが、バチウの詩の生涯を回顧し祝うために作品を寄せた。キムラは、そこに“*I luna a'o Pu'uli'uli'u*”「プ・ウリ・ウリ・ウの丘の上で」という詩を寄せている。

I Luna a'o Pu'uli'uli'u
Wawalo e ke kani a ka pū.
I ka mea nui ho'okahi:
'Ā, 'Ē, 'Ī, 'Ō, 'Ū-
Hē, Kē, Lā, Mū, Nū, Pī, Wē.
'Āmui nui nā kānaka i laila,
Paulehia i ke a'o pono,
A kū ke ahu pa'u īnika,
I nā 'ike ku'una nā 'ike hou,
I ke kāmo 'o palapala 'ia,
A lapa'apa a'ela ke ea lāhui,
I ho'omalua 'ia he mākau heluhelu,
He wā aupuni noho mō'ī.
Kūnewa akula nā hanauna o ke au,
A li'uli'u nā lā i ka'awale ai,
Kū maila ka nīnau nui,
I hea 'o Pu'uli'uli'u e loa'a mai ai?
I luna paha o kahi palapala 'āina,
E waiho mehameha leo 'ole nei
Wawalo hou ke kani a ka pū,
I luna a'o Pu'uli'uli'u.

プ・ウリ・ウリ・ウの丘の上で
法螺貝の大音声⁴⁶⁾が響き渡る
もっとも大切な想いとともの一息が込められて
アー、エー、イー、オー、ウー、
ヘー、ケー、ラー、ムー、ヌー、ピー、ウェー。
大勢の人々が押しかけ
夢中になって学んでいた

大量のインク粉が高く積み上がり（印刷に使われるために）
古く伝統とともに新しくある知について
書字において記録することで
民族の主権を燃え立たせ
リテラシー
書字文化によって支えられた
ある王国の統治。
幾世代もが瞬く間に過ぎ、
時を越えて分断が広がり
予期せぬ息苦しい疑問が首をもたげる
プ・ウリ・ウリ・ウがどこにあるか、誰が今やわかるというのか？
おそらくは、地図に書かれているのだろう
そこで見捨てられたまま、一つの声も出せずに
いま一度、蘇れ、法螺貝の大音声よ
プ・ウリ・ウリ・ウの丘の上に⁴⁶⁾

“Singing from the shores”「渚から歌うこと」と題した *MELE Archipelago* の出版記念会において、キムラは、バチウへの追慕の念とともにこの詩を朗読、解説となる言葉を添えている。プ・ウリ・ウリ・ウとは、キムラが幼年時代を過ごしたワイメア近くにある丘の名前である。そこには古く、19世紀前半には学校ができていた。朝、先住民の子どもたちが、丘の上から吹かれる法螺貝の大音声とともに、我先にと集い文字を学びにきていた。“‘Ā, ‘Ē, ‘Ī, ‘Ō, ‘Ū, Hē, Kē, Lā, Mā Nū Pī Wē”、ハワイ語は12文字しか使われる必要がなく、その音もアルファベットにすぐ適応して文字化できたことから、誰しものが、それを学びたがった。それまで音、声においてのみ発されていたハワイ語は瞬く間に文字となり、野火のようにその書字文化は広まっていった。1840年代には、ハワイの識字率は90%を超えもっとも識字率の高い国家となり、数多くの新聞が発行された。そして古代ハワイの莫大な知は文字として残ることとなったのである。しかし、その後、教育言語としてハワイ語は排除され、さらに1893年にはハワイ語は禁止、公用語は英語となる。植民地主義の歴史において、ハワイ語は衰亡の一途を辿ることになる。プ・ウリ・ウリ・ウがどこにあるのかもはや誰もわからなくなってしまいうままでに。ただネイティヴ・ハワイアの長い苦難の歴史を経て、1960年代以降、ルネッサンスを契機に復活をめざす新たなハワイ語は、その古の叡智を学ぶために、西洋のアルファベットで書かれた文字資料に多くを学んだのだ。47) キムラは次のように述べてもいた。「書き言葉を導入することはハワイにとって害悪を為すと主張するものたちもいるが、そのような考えを裏付けるような論拠は見当たらない。むしろ、それは全く逆なのだ。もしハワイ語の書き言葉がなければ、ハワイの伝統は完全に失われていたであろうから」。(Kimura, 1985) 48) キムラは、書字文化にこそ今や、ネイティヴ・ハワイアの文化と主権を回復する力があることを確信し、さらなる復興を期している。

キムラは、このように、ハワイ先住民文化について、頑なな純粹主義の立場をとらない。彼は、60年代にルネッサンスの火を点けた新たなハワイ音楽“Kani”についても、その魅力の一面を次

のように語っている。

ピーター・ムーンは、その時代以前には、ハワイで決して聴かれなかったタイプの音を生み出していた。この突然変異の創出は、よくあるハワイ料理のような、チキンロングライスのようなものだろう。チキンの塩茹でというのはハワイ的な下地である。そこに、ノン・ハワイアンな様々な取り合わせが混ぜ合わされる。生姜や、米麺、トッピングとして、青ネギやタケノコ、椎茸が加わってくるのだ。ガビーはハワイの土台、ピーターは、ジャズやサンバやロックに影響を受けたトッピングだ。ガビーとピーターは二人ともその才能の相互補完的なミックスだったのだ。そして何よりその結果ときたら、ono!「オイシイ!」のだ。⁴⁹⁾

キムラは、ハワイのAina「土地」と結びついた「祖先」の記憶を讀えるその宇宙を、文化復興の土台にしつつも、その運動を、必ずしも本質主義的なものとしてはいない。ネイティヴと移り住んできた「ノン・ハワイアン」な文化との出会いを喜び、その混淆のもとに、ルネッサンスがなっていたことを認めている。キムラのこうした認識は、自身も広島からの日系移民とハワイアンとの混血、Best of Both Worlds「両世界のいいとこ取り」⁵⁰⁾であったことにもよるのかもしれない。

キムラは、文化・精神の多様かつ寛容な交わりのうちに、ハワイ語とハワイ文化が尊ばれ、それを担うこれからの人々の未来が拓けるように、いま一度、法螺貝が吹かれるのを希求する。そしてこの詩“I luna a'o Pu'uli'uli'u”をおくった宛先にシュテファン・バチウとMELE *International Poetry Letter* 『MELE 詩の国際便』があるのは、このMELE = 詩こそ、まさにそのような精神の交歓から世界の再生を言祝ぐ文学場であり、そこへかつて、詩人が快くその詩を寄せていたからにほかならない。⁵¹⁾

阪本 佳郎

立命館大学 客員協力研究員

日本学術振興会特別研究員 (PD)

(脚注)

1) ハワイアン・ルネッサンスを、19世紀後半のFirst Hawaiian Renaissanceと20世紀後半のSecond Hawaiian Renaissanceと、二つに分ける考え方もある。19世紀のルネッサンスは、カルヴィニスト系宣教師たちによって制度上禁止されたフラなどの伝統文化が、カラカウア王が即位すると同時に、次々と再興されていったその運動を指す。一般的にルネッサンスといえば、20世紀後半、とりわけ1960年代半ばから70年代にかけてのネイティヴ・ハワイアンによる音楽や言語、文学などの文化的復興、主権回復運動を指す。本稿で、ハワイアン・ルネッサンスと述べた場合、明確に20世紀後半の第二のルネッサンスのことを指す。

2) ハワイ語が経験した植民地主義による窮状とその復興の歴史については、以下の文献を参照。Niedzielski, Henry Z., 1992, “The Hawaiian Model for the Revitalization of Native Minority Cultures and Languages.” In W.Fase, K. Japaert, S. Kroon (eds.), *Maintenance and Loss of Minority Languages, Studies*

- in Bilingualism*, vol.1, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp.369-384.
- Warner, Samuel N'oeau, 2001., "The movement to revitalize Hawaiian language and culture." In L. Hinton and K. Hale (eds.), *The Green Book of Language Revitalization in Practice*, London: Academic Press, pp.133-144.
- 松原好次, 2006, 「ハワイ語再活性化運動の現況——ナーヴァヒー校卒業生に対する追跡調査報告」, 電気通信大学紀要, 19・20 合併号, 117-128 頁。
- 松原好次, 2010, 『消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして——先住民による言語と文化の再活性化運動』明石書店。
- 3) 松原, 2006, 119 頁。
- 4) Witze, Alexandra, "Hawaiian-language experts make their mark on the Solar System", *nature*, <https://www.nature.com/articles/d41586-019-00098-w> (アクセス: 2021 年 8 月 31 日)。
- 5) The Guardian.com "powehi-black-hole-gets-a-name-meaning-the-adorned fathomless dark creation" <https://www.theguardian.com/science/2019/apr/12/powehi-black-hole-gets-a-name-meaning-the-adorned-fathomless-dark-creation> (アクセス: 2021 年 8 月 31 日)。
- 6) ここにまとめたラリー・キムラの言語復興運動への貢献についての概要は、彼の所属するハワイ大学ヒロ校の以下の紹介 HP による。Enright, Susan, "Larry Kimura, Associate Professor of Hawaiian Language" in *Keaohou*, <https://hilo.hawaii.edu/keaohou/2014/10/09/kimura-hawaiian-language/> (最終アクセス 2021 年 8 月 31 日)。
- 7) Kimura, Larry Kauanoë, 1967, *Kapalaoa Homestead Life*, Thesis submitted to University of Hawaii at Mānoa, under the pseud-name of "Nae'a". キムラは、ハワイ大学へ提出する本論文の民族誌学的調査のために Kapalaoa を調査地として選び、祖母のライカより土地の伝説などの情報を得ていた。
- 8) キムラのハワイ語詩を取り上げた数少ない研究として以下の二つが挙げられる。
- Sumida, Stephen. H., 1991, *and the view from the shore, Literary Traditions of Hawai'i*, Seattle/London: University of Washington Press, pp.252-254.
- Charlot, John, 1983, *Chanting the Universe, Hawaiian Religious Culture*, Honolulu: Emphasis International Publisher, pp, 16, 69, 70.
- 9) *MELE* の他、個人的に発行されている文学誌にてキムラのハワイ語詩が掲載されているのは、次のアンソロジー。Lueras, Leonard, Pascoe, Kathleen, Lindquist, Carl (eds), 1973, *Manna-Mana*, (self-distribution), Honolulu.
- ハワイにおける多様な人種、エスニシティ、文化的背景を持つアーティストがそれぞれの作品を持ち寄って生まれた類まれな詩選集である。選者・編集者たちによる自費出版であり、これも書店など通常の出版市場には乗っていなかった。*Manna-Mana* に、キムラは、*MELE* 8号に寄稿した "Kapalaoa" 「カパラオア」をそのまま再掲している。ちなみに、この選集にはシュテファン・バチウやジャン・シャルロも寄稿しており、バチウは英語詩をシャルロはハワイ語詩を寄稿している。
- 10) "Singing from the shores - Launching of *MELE Archipelago*, (28th September in 2019 at Basically Books at Hilo in the Big Island Hawaii) シュテファン・バチウの生誕百周年を祝い出版された *MELE Archipelago: A homage to the poet's centennial anniversary* の出版記念会に際し、ラリー・キムラとジョン・シャルロは、*MELE* に詩を寄稿していたルネッサンス当時のことを思い出し、シュテファン・バチウとの出会いについて筆者本人に話してくれた。録音あり。
- 11) Charlot, *op.cit.* p. 16.
- 12) "Poezie resista!" 「詩よ、抵抗せよ!」は、ベネズエラの詩人ルシラ・ベラスケスの詩のマニフェスト (Velasquez, Lucila, 1955, *Poezie resiste*, Mexico: Cuadernos Americanos) であり、バチウはそれを引いて、自らのエッセーの幾らかの箇所でも繰り返していた。『サンドウィッチ・ハワイ群島のブラショフ人』(Baciu, Ștefan, 1994, *Un brașovean din Arhipelagul Sandwich Hawaii*, București: Editura Albatros.) では、

MELE International Poetry Letter について回顧する「MELE 詩の国際便の四半世紀」という章において、このベラスケスの反抗の精神を表す「詩よ、抵抗せよ!」という言葉が、*MELE* の標語として振り返られている。(同書 p.66) また、『ある無頼人の覚書』(Baciu, Ștefan, 1996, *Însemnările unui om fără cancelărie*, Bucuresti: Editura Albatros.) では、ニカラグアにおいてソモサ独裁政権へ抵抗した詩人として知られるパブロ・アントニオ・クアドラの50年に渡る詩的反抗への敬意と友情の念をあらわすために、この言葉を引いている。(同書, pp.165-167.)

- 13) Baciu, Șteafn, 1965, "Manifesto of MELE" in *MELE International Poetry Letter*, nr.1, p.1.
- 14) Cuadra, Pablo Antonio, 1965 "Vision of the Great Statue" translated in English by Jose Valera Ibarra, *MELE International Poetry Letter*, nr.1, pp.2-3. 一部抜粋し、拙訳。
- 15) Man, Simeon, 2015, "Aloha Vietnam: Race and Empire in Hawai'i's Vietnam War", *American Quarterly*, Vol. 67, No. 4 (December 2015), pp. 1085-1108.
- 16) Dominis Holt, John IV, 1964, *On being Hawaiian*, Honolulu, John Dominis Holt.
- 17) Kimura, Larry Kauanoe, 2015, "Kani a Ke Au Maui Hawai'i Hou: The Sound of the Hawaiian Renaissance wave", *Hūlili: Multidisciplinary Research on Hawaiian Well-Being*, vol.10, p. 4.
- 18) *Ibid.*, p. 4.
- 19) *Ibid.* p.8.
- 20) Kimura, Larry Kauanoe, Kamae Eddie, 1978, *E ku'u morning dew*, published by Hawai'i Sons. Inc. 日本語訳はキムラの英訳からの拙訳。
- 21) Sumida, *op.cit.*, p.253. スミダは、1979年にハワイ本島で開かれた Talk Story Big Island Writer's Conference でのキムラの講演に触れている。その講演でキムラは、"E ku'u Mornign Dew" 「恋しき、朝露よ」について、ここに要約した「朝露」の歌詞のもつ背景について述べていた。
- 22) Kimura, Larry Kauanoe, 1968, "The Legend of Kapalaoa", *MELE International Poetry Letter*, nr.9, p.2. 日本語訳は、キムラ自身による英語訳からの拙訳。
- 23) Kimura, Larry Kauanoe, *Kapalaoa Homestead Life*, 1967, pp. 10-11.
- 24) Kimura, Larry Kauanoe, 1968, "Kapalaoa", *MELE International Poetry Letter*, nr.9, p.2.
- 25) Kimura, Larry Kauanoe, *Kapalaoa Homestead Life*, pp.9-10.
- 26) *Ibid.*, pp.8, 48. 地図は P8. 写真は p.48 より。
- 27) Sumida, *op.cit.*, p.252.
- 28) Kimura, Larry Kauanoe, 1973, "Luahinewai", *MELE International Poetry Letter*, nr.25, p.1b. キムラ自身による英語訳からの拙訳。
- 29) Charlot, John, *op.cit.* p.69. において書かれた内容を要約。
- 30) *Ibid.*, p.70. において書かれた内容を要約。
- 31) 例えば、以下のようなハワイ語作品が、*MELE* には寄稿されている。Charlot, Jean, 1966, "Na lono e lua/ Two Lonos" *MELE International Poetry Letter*, nr.2, pp.2-3. ジャン・シャルロは、キャプテン・クック来航をハワイ人から描いた戯曲「二人のロノ神」を創作、その一節をここに寄稿している。あるいは、Charlot, John, 1980, Untitled, *MELE International Poetry Letter*, nr.47, p.14. ジョン・シャルロは、父の死に際して *MELE* にハワイ語で追悼の献詩を寄せている。
- 32) Charlot, Jean, 1973, "A kahuna offering 'awa to a god", *MELE International Poetry Letter*, nr.25, p.1b.
- 33) 人類学者マリソル・デ・ラ・カデナは、南米エクアドルの高地アンデスにおける先住民運動に参与、その土地をめぐる闘争が、先住民のコスモロジーと、近代的世界との対立のうちにあることを示し、「コスモポリティクス」と概念化して提示している。アイユ、つまり共同体をめぐるアンデス先住民フスト・オクサの以下の言葉は、後に引くハワイ先住民の Aina「土地」の説明とも共振するところがある。「場所」をめぐる先住民の政治を考察する上でヒントを与えてくれるように思われる。「共同体、すなわちアイユは、特定の人々の集団が住む地域であるだけでなく、それ以上のものである。それは世界に存在する

- あらゆる生きものの共同体全体が生きる動的な空間で、人間、植物、動物、山、川、雨などが含まれる。これらすべて家族のような関係にある。重要なのは、この場所「共同体」は、私たちの出身地ではなく、私たち自身であるということだ。」（デ・ラ・カデナ、マリソル「アンデス先住民のコスモポリティクス『政治』を超えるための概念的な省察」、田口陽子訳『現代思想』45（4）、2017、46-80頁。上の引用は65頁より。）
- 34) Kamakawiwo'ole, Kay Osorio & Howes, Craig (eds.), 2010, *The Value of Hawai'i Knowing the Past, Shaping the Future*, Honolulu: The university of Hawai'i Press.
- 35) *Ibid.*, p.90. cited from HCDCH (Office of Hawaiian Affairs v. Housing and Community Development Corporation of Hawaii) 214 177 P.3d at 924 (2008)。拙訳。
- 36) Andrade Carlos, "hā'ena", *The Value of Hawai'i Knowing the Past, Shaping the Future*, Kamakawiwo'ole, Kay Osorio & Howes, Craig (eds.), 2010, Honolulu: The university of Hawai'i Press, pp.217-227.
- 37) *Ibid.*, p.218
- 38) Charlot, John, *op.cit.*, p.70
- 39) Pukui, Mary Kawena, and Elbert, Samuel H., 1966, *Place Names of Hawaii*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- 40) Emerson, N. B. , 1998, *Unwritten Literature of Hawai'i*, Honolulu: Mutual, p.vii.
- 41) Ingersoll, Amimoto Karen, 2016, *Waves of Knowing: A Seascape Epistemology*, Durham/London: Duke University Press, P.25
- 42) Ho'omanawanui Ku'ualoha, 2014, *Voices of fire — reweaving the literary lei of Pele and Hi'iaka*, Mineapolis/London: University of Minesota Press.
- 43) *Ibid.*, p.55. 引用は以下のキムラによる論考から。Kimura, Larry Kauano, 1985, "Hawaiian Native Culture", In *Native Hawaiian Study Commission report on the Culture, Needs, and Concerns of Native Hawaiians*, Vol.1, Washington, D.C.: Government Printing, pp.173-224. pp.178-179. に引用文。
- 44) *Ibid.*, p.55.
- 45) Sakamoto, Yoshiro (ed.), 2019, *MELE Archipelago: Homage to Ștefan Baciu For the Poet's Centennial Anniversary*, Honolulu/Kyoto: Editura Arhipelago.
- 46) Kimura, Larry Kauano, 2019, "I luna a'o Pu'uli'uli'u" in *MELE Archipelago: Homage to Ștefan Baciu For the Poet's Centennial Anniversary*, Sakamoto, Yoshiro (ed.), Honolulu/Kyoto: Editura Arhipelago, p.80.
- 47) Kimura, Larry, Kauano, *untitled talk* at "Singing from the shores - Launching of *MELE Archipelago*, (28th September in 2019 at Basically Books at Hilo in the Big Island Hawaii). 本トークにて、キムラは、"I luna a'o Pu'uli'uli'u" に込めた思いや背景にある歴史について述べている。録音あり。
- 48) Kimura, Larry Kauano, "Native Hawaiian Culture", p.20 n, 22I.
- 49) Kimura, Larry Kauano, 2015, p.12.
- 50) Strazar, M. Dolly, Larry Kimura — Best of both worlds. In Hawaii Herald (Website: <https://www.thehawaiherald.com/2015/07/27/larry-kimura-best-of-both-worlds/>: アクセス 2021年8月17日) 同記事において、ストラザールは、ラリー・キムラの混血的アイデンティティについて、そのインタビュー取材から明らかにしている。キムラは、広島出身の日系人（一世）の祖母（ラリーは、オパンと呼んでいた）、ハワイアン（ハワイ語でトゥトゥと呼んでいた）の双方に愛され、それぞれの文化を同じ分だけ最良の形で引き継いでいたという。
- 51) 本稿を執筆するにあたり、ラリー・カウアノエ・キムラ、ジョン・シャルロ両教授から多大なるご助力をいただきました。キムラ教授は、ハワイ語復興運動へのコミットメント、ハワイ語の現状とこれからの展望と可能性について、そして *MELE International Poetry Letter* への寄稿について、心よく数々の思い出とともにお話くださいました。ジョン・シャルロ教授からは、ハワイ先住民の神話世界、父ジャン・シャルロの残した業績、60年代当時の詩人や芸術家たちの交わりについて、多くのことを教えて

いただきました。この場を借りて、両教授に心よりの感謝を表します。

参考・引用文献リスト：

- Andrade Carlos, "hā'ena" in *The Value of Hawai'i Knowing the Past, Shaping the Future*, Kamakawiwo'ole, Kay Osorio & Howes, Craig (eds.), 2010, Honolulu: The university of Hawai'i Press, pp.217-227
- Baciu, Șteafin, 1965, Manifesto of MELE, *MELE International Poetry Letter*, nr.1, p.1.
- , 1994, *Un brașovean din Arhipelagul Sandwich Hawaii*, București: Editura Albatros.
- , 1996, *Însemnările unui om fără cancelărie*, București: Editura Albatros.
- Cuadra, Pablo Antonio, 1965, "Vision of the Great Statue" translated in English by Jose Valera Ibarra, *MELE International Poetry Letter*, nr.1, pp.2-3.
- Charlot, Jean, 1966., "Na lono e lua/ Two Lonos", *MELE International Poetry Letter*, nr.2, pp.2-3.
- , 1973, "A Kahuna offering 'awa to a god", *MELE International Poetry Letter*, nr.25, p.1b.
- Charlot, John, 1983, *Chanting the Universe, Hawaiian Religious Culture*, Honolulu: Emphasis International Publisher.
- , 1980, "Untitled", *MELE International Poetry Letter*, nr.47, p.14.
- Dominis Holt, John IV, 1964, *On being Hawaiian*, Honolulu, John Dominis Holt.
- Emerson, N. B. , 1998, *Unwritten Literature of Hawai'i*, Honolulu: Mutual.
- Enright, Susan, "Larry Kimura, Associate Professor of Hawaiian Language" in *Keaohou*, <https://hilo.hawaii.edu/keaohou/2014/10/09/kimura-hawaiian-language/>.
- The Guardian.com, "powehi-black-hole-gets-a-name-meaning-the-adorned fathomless dark creation "https://www.theguardian.com/science/2019/apr/12/powehi-black-hole-gets-a-name-meaning-the-adorned-fathomless-dark-creation".
- Ingersoll, Amimoto, Karen, 2016, *Waves of Knowing: A Seascape Epistemology*, Durham/London: Duke University Press.
- Ho'omanawanui Ku'ualoha, 2014, *Voices of fire — reweaving the literary lei of Pele and Hi'iaka*, Minealopis/ London: University of Minesota Press.
- Kamakawiwo'ole, Kay Osorio & Howes, Craig (eds.), 2010, *The Value of Hawai'i Knowing the Past, Shaping the Future*, Honolulu: The university of Hawai'i Press.
- Kimura, Larry Kauanoë, 1967, *Kapalaoa Homestead Life*, Thesis submitted to University of Hawaii at Mānoa, under the pseud-name of "Nae'a".
- , 1968, "The Legend of Kapalaoa", *MELE International Poetry Letter*, nr.9, p.2.
- , 1973, "Luahinewai", *MELE International Poetry Letter*, nr.25, p.1b.
- , 1985, "Hawaiian Native Culture", In *Native Hawaiian Study Commission report on the Culture, Needs, and Concerns of Native Hawaiians*, Vol.1, Washington, D.C.: Government Printing, pp.173-224.
- , 2015, "Kani a Ke Au Maui Hawai'i Hou: The Sound of the Hawaiian Renaissance wave", *Hūlili: Multidisciplinary Research on Hawaiian Well-Being*, vol.10.
- , 2019, "I luna a'o Pu'uli'uli'u" in *MELE Archipelago: Homage to Ștefan Baciu For the Poet's Centennial Anniversary*, Sakamoto, Yoshiro (ed.), Honolulu/Kyoto: Editura Arhipelago, p.80.
- , 2019, Non titled talk at "Singing from the shores - Launching of *MELE Archipelago*, (28th September in 2019 at Basically Books at Hilo in the Big Island Hawaii).
- Kimura, Larry Kauanoë, Kamae Eddie, 1978, *E ku'u morning dew*, published by Hawai'i Sons. Inc.
- Lueras, Leonard, Pascoe, Kathleen, Lindquist, Carl (eds), 1973, *Manna-Mana*, (self-distribution), Honolulu.
- Man, Simeon, 2015, "Aloha Vietnam: Race and Empire in Hawai'i's Vietnam War", *American Quarterly*, Vol.

- 67, No. 4 (December 2015), pp. 1085-1108.
- Niedzielski, Henry Z., 1992. "The Hawaiian Model for the Revitalization of Native Minority Cultures and Languages." in W.Fase, K. Japaert, S. Kroon (eds.), *Maintenance and Loss of Minority Languages*, Studies in Bilingualism vol.1, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp.369-384.
- Pukui, Mary Kawena, and Samuel H. Elbert. *Place Names of Hawaii*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1966.
- Sakamoto, Yoshiro (ed.), 2019, *MELE Archipelago: Homage to Ștefan Baciu For the Poet's Centennial Anniversary*, Honolulu/Kyoto: Editura Arhipelago.
- Sumida, Stephen. H., 1991, *and the view from the shore, Literary Traditions of Hawai'i*, Seattle/London: University of Washington Press.
- Strazar, M. Dolly, Larry Kimura — Best of both worlds in Hawaii Herald (Website: <https://www.thehawaiiherald.com/2015/07/27/larry-kimura-best-of-both-worlds/>).
- Warner, Samuel N'oeau, 2001, "The movement to revitalize Hawaiian language and culture," In L. Hinton and K. Hale (eds.), *The Green Book of Language Revitalization in Practice*, London: Academic Press.
- Velasquez, Lucila, 1955, *Poezie resiste*, Mexico: Cuadernos Americanos.
- Witze, Alexandra, "Hawaiian-language experts make their mark on the Solar System", *Nature*, <https://www.nature.com/articles/d41586-019-00098-w>.
- デ・ラ・カデナ, マリソル, 2017, 「アンデス先住民のコモポリティクス『政治』を超えるための概念的な省察」, 田口陽子訳『現代思想』45 (4), 青土社, 46-80 頁。
- 松原好次, 2006, 「ハワイ語再活性化運動の現況——ナーヴァヒー校卒業生に対する追跡調査報告」, 電気通信大学紀要, 19・20 合併号。
- , 2010, 『消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして——先住民族による言語と文化の再活性化運動』, 明石書店。

